

No.40 篠原 有司男 「ケンタウルス・モーターサイクル」

Ushio Shinohara

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成 10) 年 6 月 1 日付 立川市市報記事より

篠原有司男は、1970 年代に新しい美術運動で華々しく活躍したアーティストだ。その後アメリカに渡って仕事をしている。ファーレでは駐車場の前だということで、オートバイに乗ったケンタウルスをブロンズで作った。氏の作品はいつの時代にも既成の概念を壊していて、エネルギーある生の燃焼、生の爆発をその作品からは感じてしまう。この彫刻の形態そのものが、ライダーとオートバイの格闘だし、どの部分も手の跡がはっきりと残った、手と材料の格闘になっている。そういったすべての格闘が作品と、それを作る作家のエネルギーとして私たちに迫ってくるのである。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

リズムを獲得したぐによぐによ

生まれて初めて粘土を掴む、ぐによっとくる、ここぞと狙いをつけてたたきつける。

二貫目ぐらいつ攪拌器から次々とはきだされてくるやつを、チーズカッターの親分の様な、ピン と張ったワイヤーでずばずば。

切口はまるで京都の御菓子よろしく優雅、この三角四角のいも羊羹を、ひねり、まるめ、にゆるにゆる引き伸ばすと思いがけない型が生れる。

次に次にぼくの頭にあった予定図は崩れ、代りに新鮮なそれが取って代り驚嘆しながらも、ケンタウルスのまたがる直立した蛙モーターサイクルを作ろうとしているのだが。

世界中の彫刻家何千万人が粘土をいじりながら、先達、師匠格のロダン、マイヨール、ムアー、ジャコモッティにしたって、こんな生き生きした素材を手を、なんて貧弱な彫刻群しか生産出来なかったことか。

よし！粘土にシノハラの毒氣を目一杯吹き込んでくれるぞ！

2メートル大の溶接の抽象形骨組シュロ巻き一日半、さあ早くも粘土付けた、腰を低く構え 両手に抱えた土を、やっこらさとかぶせる、ずっしりと重量感、五本の指をぐいと突っ込み、塊を掴み出す。

目のくぼみ、口の穴がぽっかり、また両手で握り潰すようにシュロにくり込ませる。

オダンゴを20~30個作り貯め、一気にカエル全身に投げつける、ダンゴの列がリズムを生む。左手に高くないまつを捧げ、にがみばしたケンタウルスは首を強くひねって振り返り、極端に飛び出した目玉が同乗のカエルをねめつける。

後輪から発したメカニカルなギヤとチェーンが登り龍の如く上へ、だて巻きのように薄くスライスされた土はスポークに、チェーンの軸に巻き付く。

正に三日で完成! 鑄造されブロンズに変わって現れるこの新型彫刻を、ああ、待ちきれない。